

メタファーのスコープに関する一考察 —中国語“火”の場合—

韓 涛

1. はじめに

メタファーは Lakoff 流に言うと、概ね起点領域(source domain)から目標領域(target domain)への写像である¹。しかしほとんどの場合において、メタファー的写像によって特徴づけられるのは目標領域のある一側面に過ぎないため、一つの目標領域は通常複数の起点領域によって特徴づけられる²。例えば英語の愛〈LOVE〉という目標領域は、例(1)～(6)が示すように少なくとも〈物理的力〉、〈病人〉、〈狂気〉、〈魔法〉、〈戦争〉、〈旅〉の六つの起点領域を持つ³。

(1) I could feel the electricity between us.

(2) This is a sick relationship.

(3) I'm crazy about her.

(4) She cast her spell over me.

(5) He won her hand in marriage.

(6) Look how far we've come.

その一方で、一つの起点領域が複数の目標領域へと写像されることも事実である。例え

¹ Lakoff (1993)によれば、ここでいう写像とは起点領域から目標領域への一連の対応関係のことであり、また、起点領域から目標領域への写像の過程において、「不変性原理」(The Invariance Principle)というものが守られなければならないという。なお、不変性原理は一般に次のように定義される(Lakoff 1993 参照)。

“Metaphorical mappings preserve the cognitive topology (that is, the image-schema structure) of the source domain, in a way consistent with the inherent structure of the target domain.”

² その理由について、Lakoff & Johnson (1980)は、我々の概念が複数の異なる側面を持つため、一つの起点領域だけによってそのすべてを特徴づけることはできないと述べている。

³ ここに挙げた(1)～(6)の例文は、すべてLakoff & Johnson (1980)から引用したものである。なお、下線は引用者による。

ば、戦争(WAR)は愛(LOVE)のほか、議論(ARGUMENT)へも写像され、旅(JOURNEY)も愛(LOVE)や議論(ARGUMENT)へと写像される⁴。メタファーに関するこれまでの研究では、上に挙げた愛(LOVE)のように、一つの目標領域が複数の起点領域によって特徴づけられるということに関する議論が盛んになされているのに対し、一つの起点領域が複数の目標領域を特徴づけるということに関する議論はあまりなされてこなかった⁵。なぜ一つの起点領域が一つ以上の目標領域に対応しているのか、理論的に或いは経験的にこれをどのように説明すればよいかは早急に問われるべき大きな問題点である。

この問題をいち早く取り上げたのは Kövecses (1995)である。そして彼は「一つの起点領域が一体どのような、そしてどのぐらいの目標領域に写像されるか」という問題を、「メタファーのスコープ」(the scope of metaphor)と呼び、次のように定義した⁶。

The scope of metaphor is simply the full range of cases, that is, all the possible target domain, to which a given specific source concept (such as war, building, fire) applies.

(Kövecses 2000:80)

本稿は Kövecses (1995、2000) で提案された「メタファーのスコープ」という観点から、中国語“火”を起点領域とするメタファーの諸性質を考察するものである。中でも、特に“火”を起点領域とするメタファーのスコープ、“火”のメタファーの主な意味焦点、そして“火”のメタファーの中心的写像について検討する。

なお、メタファーの起点領域のスコープを考察するに当たって、本稿で“火”を取り上げる理由は次の二点にある。一点目は Lakoff & Johnson (1980) や Lakoff (1987)、Kövecses (2000) などの研究で明らかにされているように、火は起点領域として怒りや愛などの多くの抽象的な概念を特徴づけるのに用いられるため、メタファーの起点領域のスコープを考察するのに適していると考えられることによる。そして、二点目は英語の火(FIRE)のスコープに関する研究は、Kövecses (2000) によってすでになされており、本稿で中国語“火”のスコ

⁴ 具体例は Lakoff & Johnson (1980) などを参照されたい。

⁵ Kövecses (1995:316)によると、Lakoff (1993) で提案されているイベント構造のメタファー(the Event Structure Metaphor)は、幾つかの起点領域の適用(application)の範囲について説明することが可能であるという。

⁶ より厳密に言うと、メタファーのスコープはメタファーの起点領域のスコープのことである(Kövecses 1995 参照)。

ープを分析することにより、起点領域のスコープを異なる言語間において比較する研究が可能となるためである。

2. 中国語“火”のメタファーのスコープ

2.1 英語の火<FIRE>の場合

中国語“火”のメタファーのスコープと比較するために、本節では、まず英語の火<FIRE>がメタファー的にどのような概念領域と結び付いているのかをみることにする。Kövecses (2000)によると、火<FIRE>は、まず怒り<ANGER>(例えば、(7a))や渴望<AMBITION-DESIRE>(例えば、(7b))などの感情領域に写像されるとされる。

(7) a. As a child I had real hot temper.

b. Behind his soft-spoken manner, the fires of ambition burned.

(例(7)は Kövecses (2000)からの引用。下線は引用者による)

感情領域のほかにも、例(8)に示されるように、火<FIRE>は議論<ARGUMENT>や圧力<PRESSURE>など、(ある出来事/状態)を表す概念領域にも適用される。

(8) a. This problem has been hotly debated.

b. You need to perform well when the heat is on.

(例(8)は Kövecses (2000)からの引用。下線は引用者による)

しかし、なぜ火<FIRE>は怒り<ANGER>や(ある出来事/状態)などの概念領域に写像されるのか、それはどのような動機付けによるものであるのか。例えば、我々が(怒り)などの感情⁷を持つとき、或いは議論のような激しい活動に取り組んでいるとき、生理的反応として我々の身体から熱が出る。この熱は、我々に(火の熱)を呼び起こす役割を持っていると考えられる。また、(怒り)などの感情は怒り出してからおさまるまで比較的短時間で終わることなども、我々が日常生活の中で経験している(火の燃焼)のプロセスとかなり類似している。これらの経験は、火<FIRE>がほかの概念領域へと写像される際の基盤となりうる。しかし、その際の写像がどの程度行われるか、つまり起点領域のどの部分が写像されるかは依然不明瞭である。Kövecses (2000)では、「メタファーのスコープ」という概念のほかに、「メタファーの主な意味焦点」、そして「メタファーの中心的写像」という概念を道具立てとし、問題

⁷ 「感情」(feelings)と「情動」(emotion)を区別する学者もいる(Damasio1999 参照)が、煩雑さを避けるために、本稿ではこれらの違いを区別していない。

解決を試みている。

以下、北京大学がネットで公開しているコーパス「CCL 語料庫」を使用し、中国語“火”が具体的にどのような概念領域と結びついているのかを検討する。

2.2 〈感情は火である〉

第 2.1 節でみた英語の火(FIRE)の場合と同様に、中国語の“火”も起点領域としてメタファー的に抽象的な感情領域に写像される。このことは、例(9)、(10)が示すように、“火热的”[火のように熱い]がそれぞれ“心”や“情怀”[気持ち]を修飾していることから分かる。

(9) 时光的流逝并没有冷却他那颗火热的心。

[時の流れは彼の、あの火のように熱い心を冷却させることはできなかった。]

(10) 李畅兴身边的同志更能感受到他那火热的情怀。

[李暢興の周りにいる同志たちは彼の、あの火のように熱い気持ちを肌で感じている。]

ちなみに“心”や“情怀”以外に、コーパスからは“感情”、“心情”[気持ち]、“心肠”[心]、“激情”、“爱心”[愛情]、“情绪”[気分]などが“火热的”によって修飾されている例も観察された。

次節からは、“火”によって表される感情領域をさらに下位区分し、詳しく検討する。

2.2.1 〈怒りは火である〉

すでに述べたように、怒りという感情が生じる際の生理的反応の一つとして、体から熱が放出され、体温が上昇するというものが挙げられるが、これが〈怒りは火である〉というメタファー的写像が成り立つ経験的基盤であると言える。

以下の例(11)～(13)はいずれも“火”という起点領域がメタファー的に〈怒り〉という目標領域に写像されることを表すが、このメタファー的写像が成立するにはさらに別のメタファー的写像、つまり〈身体(部位)は感情を入れる容器である〉という存在のメタファーを必要とする⁸。この二つのメタファーは相容れないものではなく、身体部位は往々にして怒りが発生する場所として解釈される。

⁸ 注意すべきは、英語では、〈怒りは火である〉というメタファー的写像が〈身体部位は感情を入れる容器である〉というメタファー的写像と結び付かないのに対し、中国語では、例えば“憋了一肚子火”[怒りを腹にため込んだ(←腹いっぱい火をためた)]のように、両者が概念レベルにおいて結び付くことである(詳しくは韓 2009 を参照されたい)。

(11) 陈连的眼里迸出仇恨的火花，在黑黑的屋子里闪烁着它的光辉。

[陳連の目から憎しみの火花が飛び散って、部屋という暗闇の中で輝いている。]

(12) 尤其是当他想到芳林嫂还囚在临城，老洪的眼睛里时常冒着愤怒的火花，他是多么愿意痛快的和敌人干一场啊！

[特に芳林姐さんがまだ臨城に囚われていることを思い出すと、老洪の目から頻繁に怒りの火花が噴き出した。彼はどんなに敵と心ゆくまで戦いたがっていることか！]

(13) 料想一定出了啥事体，低声小语问他，他又不得不按住心头愤怒的焰火，微微摇摇头，说没啥。

[絶対何かがあったと思い、小さい声で彼に聞くと、彼はまた心の中で燃え立つ怒りの炎を抑えながら、頭を横に振り、何でもないと答えた。]

例(11)、(12)の“火花”は“眼”或いは“眼睛”[目]という身体部位から噴き出しており、例(13)の“焰火”は“心”の中で燃焼している。つまり、このときの目や心は〈怒り〉を内包する一種の容器として捉えられているのである。

また、“火”から〈怒り〉への写像は我々が持っている火に関する様々な知識によってさらに細密化することが可能である。韓(2009)では、この細密化のプロセスは以下に示す「発火」→「燃焼」→「消火」→「(消火失敗)噴出」の四段階に分けられることを述べている。

第1段階「発火」

火は何らかの原因で燃え始める。

(14) 怒火发作[怒り出す]、胸中怒火骤燃[急に怒り出す(←胸の中で炎が急に燃え始める)]、满腔怒火爆发[激しく怒り出す(←炎が胸の中で激しく燃え出す)]……

第2段階「燃焼」

時間の経過とともに、炎は高く燃え上がる。

(15) 怒火高烧[怒りが燃え上がる]、怒火中烧[怒りが胸中に燃え盛る]、怒火越发炽烈[怒りがエスカレートする(←火がますます盛んに燃える)]……

第3段階「消火」

ここで消火作業が行われる。消火に成功した場合、火は鎮火するが、失敗した場合にはそのまま燃え続けることになる。

(16) 强忍怒火[怒りをじっと我慢する]、抑制住心中的怒火[心の中の怒りを抑え込む]、压抑着一腔怒火[满腔の怒りを抑える]……

(i)「消火成功」

(17) 咽下一把怒火[怒りを飲み込む]、怒火暂时停歇下来[怒りが一時的におさまる]、熄灭熊熊怒火[激しい怒りをおさえる(←ぼうぼうと燃え盛る炎を鎮める)]……

(ii)「消火失敗」

(18) 按捺不住心头的怒火[心の怒りをおさえられない]、无法克制自己沸腾的怒火[沸き立った怒りをおさえられない]、怒火未消[怒りがいまだに消えない]……

第4段階「(火が外に向けて)噴出」

消火に失敗した火がついに限界点に達し、一気に噴出する。

(19) 怒火像熔岩般喷发了[怒りが熔岩のように噴出した]、怒火冲天[激怒する(←炎が天を衝く)]、火冒三丈[烈火のごとく怒る(←炎が三丈の高さまで噴き出す)]……

2.2.2 〈愛は火である〉

“火”は〈怒り〉のほかにも〈愛〉という感情領域へも写像される。このメタファーは、前節でみた〈怒りは火である〉と同様、我々の生理反応を含む身体経験を基盤とする。例えば恋人同士は手をつないだり、腕を組んだりして常に肌と肌とがふれあうことにより、二人の間の体温がおのずと高くなる。例(20)、(21)の“火热的”がそれぞれ愛やカップルを修飾しているのは〈愛の激しさは火の熱である〉というメタファー的写像が我々の概念体系の中に確かに存在するということを裏付ける言語的証拠である。

(20) 除了火热的爱之外，任何东西都不是永恒的。

[火のように熱い恋愛以外に、永遠というものは存在しない。]

(21) 男与女碰额叽里咕噜的细语，一瞧就晓得是一对火热的情侣。

[男と女が互いに額をくっつけてむにやむにやしゃべっている様子から、火のように熱いカップルであることがすぐ分かる。]

また、〈火〉に関する我々の知識の中に(温度の高い)二つの物体が互いに激しくぶつかり、その衝撃で火花が飛び散るという通俗的な理解がある。そして例(22)、(23)のように、〈火〉が〈愛〉に投射される際、この知識も一緒に目標領域に投射されるのである。

(22) 鸿雁传书，两颗年轻的心互相撞击着，迸溅出爱情的火花。

[文通の中で若い二人の心が互いにぶつかり合い、やがて愛の火花が飛び散った。]

(23) 事实上，他们不仅写书，而且谈情，爱情的火花一触即发。

[事実上、彼らは一緒に本を書くだけでなく、恋愛についても語り合う。そのうちに愛の火花が一触即発の状態になった。]

さらに、この種のメタファー的含意には、例(24)、(25)が示すような〈愛の激しさの変化は熱の変化である〉というようなものも存在する。

(24) 理智对于如火如荼的男女情爱往往是格格不入的。

[理性は激しく燃える男女の間的情愛とはまったく相容れないものである。]

(25) 因此他在 1925 年赴欧洲，以便使爱情的火焰冷却下来。

[(二人の間の)愛情を冷却させるため、彼は 1925 年に欧州に出向いた。]

2.2.3 〈望み/期待は火である〉

感情領域の中で〈火の熱〉によって(部分的に)概念化される感情の下位タイプは、上にみた〈怒り〉や〈愛〉のほかにも、〈望み/期待〉も観察される。

(26) 张凤奎在刺骨的雪风中爆裂着这个火热的愿望。

[張鳳奎は身を刺すような吹雪の中で火のように熱い願望をはじけさせていた。]

(27) 群众热切盼望修出一条致富路。

[民衆は富をもたらす道を作ることを切に望んでいる。]

例えば例(26)、(27)は〈望み/期待の激しさは火の熱である〉というメタファー的写像を想定していると言える。ただし、〈望み/期待〉は、〈怒り〉や〈愛〉に比べると、メタファー的含意が少ない。換言すると、我々が〈火〉を通して感情を概念化する際、一律に怒りや愛、望みなどの感情を捉えているのではなく、より精緻化されるものもあれば(例えば〈怒り〉や〈愛〉)、あまり精緻化されないものもある(例えば〈望み/期待〉)と言える。

2.2.4 〈感情は火である〉というメタファーの身体的基盤

以上、“火”が感情領域にメタファー的に写像される際の下位区分として、〈怒り〉、〈愛〉と〈望み/期待〉の三つを取り上げて考察した。この三つの下位区分は、精緻化のレベルにおいて程度の差があるものの、我々が〈火〉という概念を通してこれらの感情(の一側面)を理解しているということに関して一致している。

しかし、なぜこれらの感情は首尾一貫して〈火〉によって理解されるのであろうか。本稿ではこれを動機付けるものとして〈感情は火である〉というメタファーが持つ身体的基盤の役割が大きいと考える。すでにみたように、我々は怒りや愛などの感情が生じる際、それに伴う

生理的反応を知覚することができる。例えば我々が怒っているとき、体温が上昇したり、顔や首の周りが赤くなったり、血圧が上がったりする。そして、愛を感じる時には、体温や血圧が上昇するほか、抱擁(つまり体の接触)が多く行われる(感情とそれに伴う生理的反応についてはさらに Ungerer & Schmid (1996)を参照されたい)。ゆえに、我々はこれらの感情を経験するとき、これらの感情によってもたらされる熱などの生理反応をも一緒に経験する。さらにこの熱などの生理反応は概念レベルにおいて〈火の熱〉と結びついた結果、我々は、直接理解するのが困難な怒りや愛などの抽象的な感情を、直接理解可能な物理的物体である“火”を通して概念化することが可能となると考えられる。

2.3 〈ある状況⁹は火である〉

本節では我々は〈火〉を通して〈状態〉や〈出来事〉などの抽象的概念を理解しているということについて考察する。

まず〈ある状態〉が〈火の熱〉によって特徴づけられる場合をみしてみる。

(28)a. 60年代, 他结束了大学时代便投入了火热的生活。

[60年代、彼は大学を卒業してすぐに火のように熱い生活に身を投じた。]

b. 就在那火热的斗争生活里, 他遇到了M, 一位美丽清纯, 坚强能干的女性。

[あの火のように熱い戦時下の生活の中で、彼は M という美しくて清純で才能のある女性に出会った。]

Lakoff & Johnson (1980)、Lakoff (1993)などによれば、ある事物や概念がメタファー的に理解される際、当該事物や概念のある一側面がメタファー的写像によって相対的に際立たされるのに対し、別の側面がそのメタファー的写像によって隠されてしまうという性質がメタファーにはあるとされる。この観点に基づけば、例(28a)では“火热的”という修飾成分によって“生活”の「慌ただしく激しい一面」が際立たされていると言える。また、この例文中の“60年代”というワードにも注目したい。この時期の中国はちょうど農工業の大増産を目指して国を挙げて国民を総動員し、各地で大規模な大躍進運動を活発に展開した時期である。このような時代背景を考えると、当時の〈生活の激しさ〉を〈(盛んに燃える)火の熱〉を通して捉えることは極めて自然である。

また、例(28b)の“斗争生活”においても同様であり、高ぶる国民の感情や落ち着かない

⁹ 本稿では、感情領域を除いた「状態」や「出来事」を含めた抽象的な上位概念を「状況」と呼ぶことにする。

生活状態が我々に〈火の熱〉を喚起させるのに一役買っている。

一方、例(29)が表しているように、〈ある出来事〉¹⁰も〈火の熱〉によって特徴づけられる。

(29)a. 时值天寒地冻, 工地却热火朝天。

[時まさに酷寒に当たるが、工事は急ピッチで進んでいる。]

b. 这几年我国大陆大量楼房纷纷到香港推销, 广告战打得热火朝天。

[ここ数年内陸の住宅業者が相次いで香港まで販路拡大を求めた結果、広告戦はますますエスカレートしている。]

例えば、例(29a)では、汗を流しながら懸命に働く作業員の姿が工事現場のあちらこちらで動き回る無数の重機やダンプカーと重なるといような場面が想像され、一方、例(29b)の場合については、各広告代理店が生き残りをかけて鎬を削っている様子が容易に想像される。いずれの出来事も我々に盛んに燃える〈火の熱〉を喚起させることができる。

例(28)、(29)は、いずれも〈ある状態/出来事の激しさは火の熱である〉というメタファー的写像を表しているが、このほか、例えば〈火の速さ〉、〈火の赤み〉などの側面も抽象的な概念領域に投射されることが可能である。

(30)a. 人命关天, 情况火急。[人命に関わっているため、一刻の猶予も許さない。]

b. 他们火速赶到现场, 并在半个多小时内将罪犯分子抓获。

[彼らは大急ぎで現場に駆けつけ、しかも30分も経たないうちに犯人を捕まえた。]

c. 等老陈风风火火赶回来时, 父亲已入土两天了。

[老陳があたふたと帰ってきた時点で、父が埋葬されてすでに二日経っていた。]

例(30a)は、生死に関わる問題であり、一刻の猶予も許さない緊急事態であることを表しているが、概念レベルでは、〈事態の緊急さ¹¹は火である〉というメタファー的写像が見出される。この場合、我々が持っている火に関する次のような知識が起点領域から目標領域へと写像されている。即ち、もし火災が起きれば、消火活動が行われない限り、人の意志に関わらずどんどん被害を拡大させていくため、緊急性が高いという知識である。この知識を起点領域から目標領域へと持ち込んだ結果、目標領域がメタファー的に「もし重大な出来事が起きれば、介入行為が行われない限り、人の意志に関わらずどんどん状況を悪化させていくので、緊急性が高い」というように理解される。

¹⁰ 例(28)を「状態」、(29)を「出来事」と呼ぶ理由は、例(28)では“火热的”が定語の位置を占めているのに対し、(29a)では“热火朝天”が述語の位置を、(29b)では補語の位置を占めているためである。但し、両者にははっきりした線引きが存在せず、程度の問題である。

¹¹ 言うまでもなく、このいう〈緊急さ〉も〈激しさ〉の一種として考えられる。

同様に、例(30b)の犯罪事件や例(30c)の父の訃報についても緊急な出来事であると言えるが、例(30b)、例(30c)は緊急な出来事が発生した後に、人々がそれをどのように対処しているかということに焦点が置かれている。例えば例(30b)では、犯罪事件が起きたとき、彼らは大急ぎで現場に駆けつけ、犯人を逮捕したということを表している。しかし注意すべきことは、犯罪事件が起きてから(彼らが)現場に駆けつけるまでの時間が〈火の速さ〉を通して部分的に概念化されていることである。なぜこのようなメタファー的写像が成立するのだろうか。例えば、我々が持っている火災の知識の中に、火が A 地点で発生した場合、一瞬にして次の B 地点に延焼してくる可能性があるという知識がある。但し、この知識は、起点領域からすべて目標領域に写像されるのではなく、目標領域の固有のトポロジー(つまりイメージスキーマ)構造と矛盾しない部分だけが起点領域から目標領域まで写像されるのを許されるのである。この場合、その部分に該当するのは〈火の速さ〉である。なお、この考え方は(30c)にも適用される。即ち予期せぬ出来事(父の訃報)に動転し、慌てて行動するさまが〈火(及び風)の速さ〉を通して部分的に概念化されていると言える。つまり、例(30b)、(30c)では概念レベルにおいて〈行動の激しさは火の速さである〉というメタファー的写像が見出されることになる。

(31)a. 今年他干起了花生米生意，做得还挺红火。

[今年彼がやり始めた落花生の商売はまあまあ繁盛している。]

b. 沿海地区一度炒得十分红火的房地产，价格明显回落。

[沿海地区では一度勢いよく上昇した不動産の価格がまた大きく下がった。]

c. 现在小两口和睦相处，生了一胖小子，日子过得很红火。

[現在若い夫婦二人は仲睦まじく、丸々と太った男の子も生まれ、生活はとても豊かだ。]

例(31a)～(31c)はいれずも〈ある状態は火の赤みである〉というメタファー的写像を想定していると言える。この場合、メタファー的写像の目標領域は、(31a)の「商売」や(31b)の「不動産」などの事業が順調であることや、(31c)の「生活」が豊かであることから分かるように、〈望ましい(つまりポジティブな)状態〉である。注意すべきは、ちょうどこの目標領域に合うように、メタファー的写像の起点領域である〈火の赤み〉も「赤」という色によってポジティブな価値観が付与されていることである。中国では、例えば“开门红”[幸先よいスタートを切る]や“披红”[赤い絹を体にかける]などが表しているように、「赤色」は通常ほかの色に比べ縁起がよいという考え方がある。そのため、POSITIVE IS RED というメタファーが中国文化

の中に存在しており、これが人々の(一部の)価値観を構成していると言える。

以上の考察をまとめると、〈状態/出来事〉は〈火〉の持つ幾つかのサブドメイン、例えば〈火の熱〉、〈火の速さ〉、〈火の赤み〉などによって部分的に理解されていると言える。

2.4 英語との比較

本節では、第 2.1 節でみた英語の火〈FIRE〉のスコープと中国語“火”の場合を比較してみる。まず(精緻化(elaboration)の程度の差があるものの、)両者は〈火〉から〈感情〉へとメタファー的写像が行われる点において一致している。その理由は我々の身体経験にある。即ち特定の感情(例えば怒りや愛)が生じる際、それに伴って現れる生理反応(例えば体温の上昇)にある程度の普遍性があるため、異なる言語間であっても大きな差異はみられない。そして感情以外にも、火が〈ある状況〉に写像されることも両言語から確認できる¹²。しかし一方で、必ずしも一致しない部分もある。例えば、中国語では〈行動の激しさは火の速さである〉や〈ポジティブな状態は火の赤みである〉といったメタファー的写像が確認されるが、英語では確認されない。その理由を考えると、例えば〈ポジティブな状態は火の赤みである〉というメタファー的写像が中国語母語話者の(一部の)価値観を反映しているように、メタファー的写像がその国の文化・社会的要因に左右されるということが挙げられる。起点領域のどの部分が選ばれて目標領域に写像されるかはメタファーの意味焦点に関係すると Kövecses (2000)は指摘している。第 3 節ではこの問題を検討する。

3. “火”のメタファーの主な意味焦点

第2節で検討した“火”のメタファーのスコープからも分かるように、我々は感情(ないしはある状況)を、火を通して理解する際、〈火〉に関するすべての知識を用いるわけではない。つまり、起点領域に関する知識の中のどの部分が選択されやすく、どの部分があまり選択されないのかはある程度決まっているように思われる。例えば、これまでに取り上げた〈火の熱〉(“火热”)や〈火の赤み〉(“红火”)は起点領域の中で比較的用いられやすい知識であり、一方、以下にみる〈火の様態〉を表す“火舌”[大きな炎]は起点領域の中では用いら

¹² 但し、英語では熱(HEAT)が圧力(PRESSURE)に適用されるようなメタファー的表現(例(8b)参照)が観察されるのに対し、中国語では“酷寒与酷热的双重压力”[酷寒と酷暑の二重圧力]、“狂热的压力”の二例を除けば「CCL 語料庫」というコーパスからはほとんど観察されない。

れにくい知識である。

(32)a. 争论爆发了, 话头就恰似篝火的火舌一样闪烁着。

[論争が爆発し、話の始まりからまるで焚き火のようにちらついていた。]

b. 白酒清亮似水, 滑入喉内却如一条火舌, 吞噬着我的脏壁。

[白酒は見た目では清冽な水のようにであるが、口に入れた瞬間まるで炎のように私の臓器をのみ込んでいく。]

選択されやすい知識、例えば“生意红火”[商売繁盛]は、もはやレトリックとしての意味合いがなく、日常言語の一部になっている。これに対し、例(32)が示すように、あまり選択されない知識を用いて別の概念を理解する場合は、表現自体の定着度が低いため、理解を阻害したり、特殊な修辞効果をもたらしたりすることがある¹³。Kövecses (2000)は、ある言語共同体において起点領域に関する知識の中で好んで選択されるものは、即ち当該メタファーの意味焦点であると指摘している。以下では、まずメタファーの意味焦点とは何かを確認しておく。

3.1 メタファーの主な意味焦点とは

Kövecses (2000)は、メタファーの主な意味焦点を次のように定義している。

Each source is associated with a particular meaning focus (or foci) that is (or are) mapped onto the target. This meaning focus (or foci) is (are) constituted by the central knowledge that pertains to a particular entity within a speech community. The target inherits the main meaning focus (or foci) of the source.

Kövecses (2000:82)

つまり起点領域から目標領域へと写像が行われる際、起点領域は通常意味焦点と共に写像される。この意味焦点は Kövecses (2000)によれば、ある言語共同体におけるメインの知識 (central knowledge)¹⁴ のことであり、目標領域は起点領域の意味焦点を継承するという。このような観点から、メタファーは起点領域からランダムに目標領域へと写像されるのでは

¹³ 好んで選択されるものは比較的常套的(つまり慣習化された)メタファーの中に現れやすく、あまり選択されないものは、非常套的メタファーに現れやすい。言うまでもなく、常套的ものとそうでないもの間にははっきりした線引きが存在せず、あくまで程度の問題である。

¹⁴ ここにいうメインの知識は Langacker (1987)を踏まえている。詳しくは Kövecses (2000:82)を参照されたい。

なく、ある言語共同体が共有する起点領域の意味焦点の部分が優先的に写像されるという制約を持つことになる。言い換えると、複数のメタファー的写像の中にはより中心的な写像もあれば、周辺的な写像もあるということである(メタファーの中心的写像については第4節で検討する)。

3.2 “火”のメタファーの主な意味焦点

前節に挙げた Kövecses によるメタファーの主な意味焦点の定義からも分かるように、メタファーの意味焦点は、即ちその言語共同体におけるある事物に関するメインの知識である。本節ではこれを踏まえて中国語“火”のメタファーの主な意味焦点を考察する。

我々が日常的経験を通して様々な形で火に触れる中で〈火〉に関する豊富な知識が形成されている。そしてこれらの知識は一つのネットワークを構成していると考えられる。(経験による個人差も考えられるが、)中国語母語話者が持っている〈火〉に関する知識のネットワーク(の一部)は図1のように示すことができる。

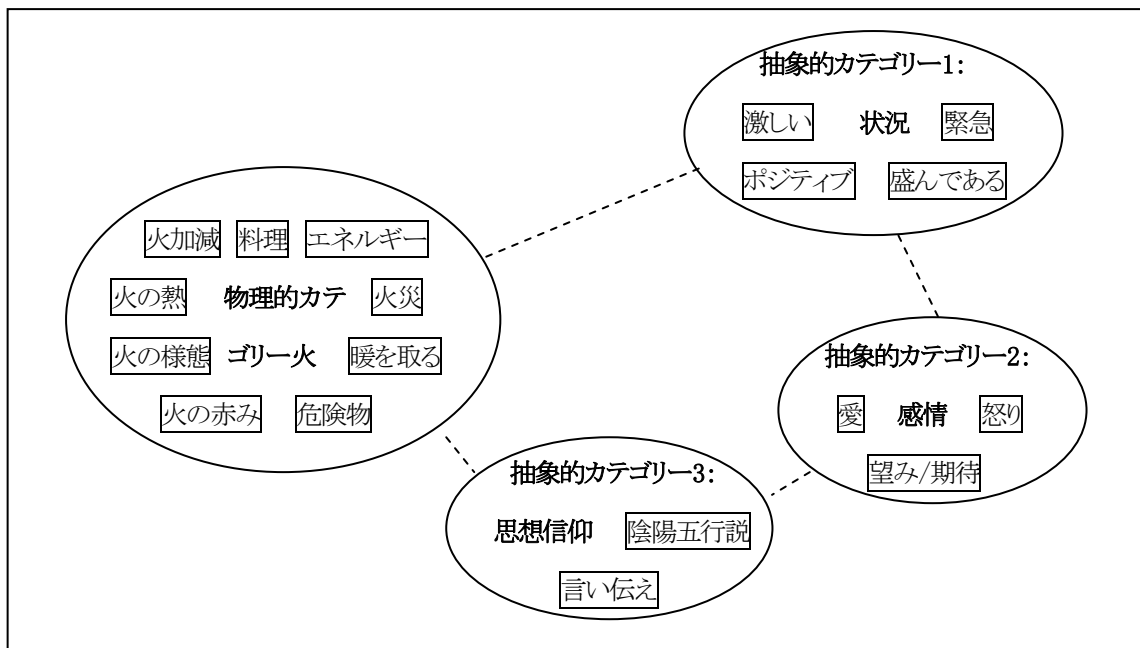


図1 中国語母語話者が持っている〈火〉に関する知識のネットワーク(の一部)

図1が示している通り、これらの知識は、例えば〈火の熱〉や〈火の赤み〉などのように火そのものの属性に限らず、火を使って料理をしたり、暖をとったりするといった日常的な行為に至るまで、広範に分布している。そして何より重要なのは、これらの知識が物理的な〈火〉の

カテゴリーにとどまっておらず、メタファーなどを介して人の感情や思想信仰、そして人を取りまく状況などの抽象的なカテゴリーにまで広がっていることである。しかし注意すべきは、起点領域〈火〉に関するこれらの知識がすべて目標領域に写像されるわけではないということである。例を挙げると、我々が普段料理する際に必要とする“旺火”[強火]、“中火”[中火]、“小火”[弱火]、“微火”[とろ火]などの火の強さに関する知識が目標領域に写像されるような例は、筆者が使用するコーパスからは観察されなかった¹⁵。

また、例えば我々が焚き火を使って暖を取る際に、小さな火と大きな火から得られる暖かさ(つまり熱の量)の違いから、〈火(の熱)〉は量的な側面、つまり、存在論レベルにおける尺度を持っていることが分かる。そしてそれぞれ尺度の低い方が〈事物の始まり〉に、尺度の上の方が〈事物の発展段階〉に対応していると言える。しかし、ある目標領域を尺度の下の方に置いて「始まり」として捉えるのか、それとも上の方に置いて「発展段階」として捉えるのかは全く恣意的であるというわけではない。例えば第2節で取り上げた“火热的”を含む多くの具体事例は、言語レベルにおいて火の尺度を細かく指定していないにも関わらず、状況や場面から考慮すればこれらの事例がいずれも尺度の上の方に対応していることが分かる。つまり、中国語母語話者には事物を火の熱の尺度の上の方に置いて理解する慣習があるということが言える。同様のことは“火速”、“红火”にも適用される。

以上の考察を踏まえ、本稿では“火热的”が表す〈火の熱〉、“火速”が表す〈火の速さ〉、“红火”が表す〈火の赤み〉のうち、〈火の熱〉が主な意味焦点であると考え。その根拠として示すのが次の三点である。一点目は〈火の熱〉は火の持つ最も基本的な性質の一つであり、火について我々の主な関心を集めている点である。二点目は特定の感情や状況を経験する度に、体から熱が放出され、体温が上昇するという生理的反応をも一緒に経験することが常に我々に〈火の熱〉を喚起させる役割を持っている点である。三点目は〈火の熱〉が〈状況〉のみならず〈感情〉という抽象的な概念領域にも写像されるのに対し、ほかの二つは、〈状況〉という目標領域にしか写像されないためである。

4. “火”のメタファーの中心的写像

¹⁵ しかし、“旺火”や“中火”などの上位概念に当たる“火候”[火加減]については、例えば“他的书法到火候了”[彼は書家として円熟の域に達している] (中日辞典(小学館))のように、メタファー的表現に用いられる。これはLakoff(1987)で述べた概念メタファーを生産的にする一つ目の方法、即ち語彙的なものによるものであると思われる。

第3節で検討した“火”の意味焦点から、我々は〈感情や状況を含む〉ある事物は火である〉というメタファーを、主に〈事物の激しさは火の熱である〉、〈出来事の緊急さは火である〉、〈行動の激しさは火の速さである〉、〈ポジティブな状態は火の赤みである〉の四つのサブマッピング(submapping)を通して理解していることが分かる。そしてこのうちの〈事物の激しさは火の熱である〉は〈ある事物は火である〉というメタファーの中心的写像であると言える。Kövecses (2000:83-84)によれば、あるメタファーの中心的写像は通常、以下の四つの特徴を持つとされる。第一に、概念レベルにおいて、中心的写像はほかの基本的写像やメタファー的含意を含む写像を導くこと。第二に、文化レベルにおいて、中心的写像は我々が問題となる起点領域のどの部分に主な関心に向けているのかを反映すること。第三に、動機付けの観点から、中心的写像は最も強力な経験的動機付けを持つこと。そして第四に、言語レベルにおいて、中心的写像はあるメタファーを言語化する多くのメタファー的表現を占めることである。

次に、以上の四つの特徴が中国語“火”の場合にどのように反映されているのかを考えてみる。まず、概念レベルにおいて〈事物の激しさは火の熱である〉という写像が中心的写像であるとするれば、これにより「火の熱が下がれば、事物の激しさが下がる」というようなメタファー的含意が自然と導かれる(例えば、例(9)、(25)参照)。そして文化レベルにおいて特定の感情や状況が〈火の熱〉を通してメタファー的に理解されうることから、〈火の熱〉には中国語母語話者の主な関心が寄せられていると言える。また、この写像が持つ経験基盤は、直接我々の身体経験に結びつくという点において言えば、極めて強い動機付けを持つ。例えば、我々が怒りや愛などの感情を持つとき、或いは人命に関わる重大な状況に陥るとき、一般的な生理的反応として体から多くの熱が放出されることが挙げられる。最後に、我々が“火”という起点領域を通して別の領域を理解する際に、“火”のどの部分に最も関心を寄せているかということと、それに関連するメタファー的表現が最も豊富に現れることとは強い相関関係を持つと考えられる。第2節で検討した通り、この二点も〈事物の激しさは火の熱である〉という写像において適用される。

5. おわりに

本稿では、Kövecses (1995, 2000)で提案されている「メタファーのスコープ」という概念を援用し、中国語“火”のメタファーのスコープについて考察した。その結果、以下のような

結論が得られた。

まず、同一起点領域であっても、起点領域のどの部分が目標領域に写像されるかは言語によって一致する側面と一致しない側面の両方が存在するということが分かった。一致する側面とは、主に身体を基盤に得られる経験に基づくものであり、例えば、怒りや愛などのような感情が生じる際に伴う体温の上昇(つまり熱)と、基本レベルのカテゴリーに属する火の持つ〈熱〉という属性の間の類似性は、英語のみならず中国語にもみられる。一方、火に関する中国語と英語の間の差異は主に両言語をとりまく文化・社会的要因に関係する。例えば、中国文化では、赤い色がポジティブな価値観を有するため、その典型例である〈火の赤み〉が目標領域に写像される際にこの価値観も一緒に起点領域から目標領域へと写像される。しかし、このような価値観を有さない言語共同体(例えば英語)では、当然このような写像はみられない。

また、中国語“火”の場合のみにに関して言えば、“火”の主な意味焦点、即ち中国語母語話者が持っている“火”に関するメインの知識は、〈火の熱〉であるということが明らかになった。なお、この部分を含んだ中心的写像は中国語話者にとって最も慣習的なものであると同時に、より多くの抽象的概念領域に適用される写像でもある。

[主要参考文献]

- Barcelona, Antonio. 2000. Introduction: The cognitive theory of metaphor and metonymy. *Metaphor and Metonymy at the Crossroads*. Mouton de Gruyter.
- Kövecses, Zoltán. 1995. “American friendship and the scope of metaphor”, *Cognitive Linguistics* 6-1: 29-46
- Kövecses, Zoltán. 2000. “The scope of metaphor”, In Antonio Barcelona (ed.), *Metaphor and Metonymy at the Crossroads*, 79-92. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Lakoff, G. and Johnson, M. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: Chicago University Press.
- Lakoff, George. 1987. *Women, fire and dangerous things*. Chicago: Chicago University Press.
- Lakoff, George. 1993. “The contemporary theory of metaphor”, In A. Ortony (ed.), *Metaphor and Thought*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ungerer, F., & Schmid, H.-J, 1996. *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London:

Addison Wesley Longman Limited.

Damasio, Antonio. 1999. *The feeling of what happens: Body and Emotion in the Making of Consciousness*, Harcourt. (田中三彦訳(2003)『無意識の脳自意識の脳:身体と情動と感情の神秘』講談社)

韓涛 2009. 「感情のメタファーはメニミーに基づくか: 中国語のケース」, 『日本認知言語学会第10回記念大会』(9月27日京都大学) 口頭発表。

韓 濤